滋賀県教育振興基本計画審議会　第２回会議　議事録

Ⅰ　日　時　平成 30 年６月 21 日（木）９：３０－１２：００

Ⅱ　場　所　滋賀県庁東館７階大会議室

Ⅲ　出席者

出席委員：浅井雅委員、井上勝委員、今宿綾子委員、大澤厚美委員、奥山みどり委員、小野田文雄委員、橿原義幸委員、神部純一委員、喜名信之委員、清水あすか委員、武井哲郎委員、橘円委員、檀原泉委員、中作佳正委員、松並典子委員、松村実委員

県出席者：青木教育長、河瀬教育次長、澤教育次長、山田教育総務課長、岸田教職員課長、西川高校教育課長、辻本幼小中教育課長、森特別支援教育課長、首藤人権教育課長、合田生涯学習課長、湯木保健体育課長、西谷文化財保護課長、杉本教職員課主席参事、松野健康福利室長、青木高校再編室長、奥村生徒指導・いじめ対策支援室長、前田私学・大学振興課長、辻スポーツ局副局長、南子ども・青少年局長

傍聴：なし

Ⅳ　議事録

１　第２期滋賀県教育振興基本計画の評価と課題について

会長　　それでは、次第に沿って進めてまいります。

第１回審議会におきましても、次期基本計画を考える前提として、現行の第２期基本計画についてどのように評価しているのかとのご意見をいただいておりました。

次期基本計画についてご議論をいただく前に、まず次第１の「第２期滋賀県教育振興基本計画の評価と課題」について、事務局から説明をお願いします。

事務局　　（資料１・２に基づき説明）

会長　　委員の皆さま、ただいまの説明について、ご質問等ございませんか。

委員　　今回の第２期の評価というところで、学校と地域の連携の体制づくりということが、直接的には今読み上げていただいた資料１の８ページから９ページにかけて出ております。また、それ以外の箇所でも、例えば特色ある学校、魅力ある学校をどうするのかというところでも６ページですが、学校づくり

の連携協働というものを示していく必要が課題としてあるということが書かれていました。その中で、市町による温度差があるため体制構築に向けた支援が必要であるということが書かれていたところで、私自身も市町ごとに取り組む状況が異なっているということは、県の教育委員会を通じて知らせていただいているところなんですけれども、この原因といいますか、なぜこういった状況にあるのかということについて、事務局のほうでどのようにお考えになっていらっしゃるのかお伺いできればと思います。

生涯学習課長　生涯学習課長でございます。市町の取組の違いでございますけども、いろいろ要因があるかとは思うのですが、自治体ごとの体制の大きさなどの違いがあると思っております。また、併せて、もともとその歴史的にいろいろな地域連携の取組をしていく中で、常にある体制というのが今の新制度、必ずしも一致しない場合もあるということを声として聞いているところでございます。我々といたしましては、学校地域連携と言いましてもいろいろな、放課後子ども教室ですとか、土曜学習ですとかいろんな取組がございますので、そこをうまく組み合わせいくことが必要かと思っております。その中で、今回１つ法律でありまして、社会教育法の改正がございまして地域の共同運営の法律上地域参画ですとか、あるいはコミュニティスクールの努力義務化がありましたので、ある程度学校ごとに法律上の規定の中で根拠を持って持続可能性があり、かつ柔軟な対応ができるといったことについて、今後事例研修や研修などといった場を通じて支援をしていきたいと考えているところでございます。

委員　　ありがとうございます。今の持続可能な体制づくりということが、私自身も市町の担当の方とお話ししているとよく聞くところであります。具体的に言いますと、これは第３期に向けてということでもあるかもしれないですが、やはり学校と地域の連携協働というのは、どうしても翌年予算的にどうなるか分からないという中で、果たしてどういう形で続けていったらいいのかということが、市町の御担当の方々また現場の学校地域で御活躍になっている方々も悩みとして出されているところです。県の財政の問題もあるかと思うのですが、やはり教育振興基本計画の中で行政としてどういう条件整備をしていくのかということも、もちろん柔軟な体制づくりというのは一つあるとは思うのですが、これと並行して御検討いただきたいと感じました。

委員　　７ページで安全安心な学校地域を作るということで、避難訓練等により防災教育を行ったと書いてありまして、資料２でも４ページに学校防災委員会

を年間３回以上開催したと書いてあるのですけども、この学校防災委員会というのは、具体的にはどういったことをされているのですか。

保健体育課長　学校の防災教育という中で、いったいどういう事をしているかということでございますが、平成２５年度から各学校に学校防災の教育コーディネーターという一定指導的役割を果たす者を位置づけるという中で、学校防災委員会というのを設置しております。これは学校の中の連携を図りますとともに、例えば各消防署とか学校の防災教育のアドバイザー、こういったものと協力、連携をする、そういった橋渡しにもなるという役割がございます。その中で、例えば消防署等と連携して、学校の避難訓練を行ったり、そういった形で学校の日頃の防災、訓練などを学校の中でまとめる役割を果たしているものでございます。

委員　私は神戸の出身でして、阪神淡路大震災も経験しておりますし、一昨日も地震があったところなので、この防災の件に関してはハード面でもソフト面でも今後力を入れて推進していただく必要があるかなと思いますのでどうぞよろしくお願いします。

２　次期教育振興基本計画骨格案について

【基本目標およびサブテーマについて】

会長　次第２の「次期教育振興基本計画骨格案について」ですが、本日は、次期基本計画の骨格となる重要な部分であります「基本目標」「サブテーマ」「目標達成に向けた柱立て」について、ご審議いただき、決定していきたいと考えております。

ご審議いただくにあたりまして、そのたたき台となる資料をご用意しておりますので、事務局から説明をお願いします。

事務局　（資料３～６により説明）

委員　サブテーマについてですが、人生１００年を見据えたという言葉は「教育」にかかっていく修飾語になるのか、「夢と生きる力」にかかっている修飾語になるのかどちらになるのでしょうか。

それと、これは基本目標やサブテーマに対する質問や意見ではなく、この会の進め方についてなのですが説明をしていただいた後に瞬時に反応して意見を言うことは委員として少し辛いなと感じます。もし、すこしお時間をいただけるのであれば小グループに分かれて話合いをした後に意見交換をする

というのはいかがでしょうか。

会長　　ありがとうございます。今いただいた御意見から、少し集団で話合いをするということでよろしいでしょうか。

（委員異議なし）

会長　　ありがとうございます。では、４つのグループに分けて時間の関係もございますので１０分ほど話合いをしたいと思います。

（グループで話合い）

会長　　グループごとに御議論いただきありがとうございます。それでは、４つのグループでそれぞれどのような話があったか、特に今回は基本目標とサブテーマを中心にお話をいただければと思います。

委員　　こちらは４名で話合いをしまして、まず基本目標については１期と２期を見比べていますとここは変わらないというお考えなのかなと感じました。そこは踏襲しながら、サブテーマできちっと焦点を絞った文言が出てくればよいのかなと思います。なので、基本目標はこのままになるのですが、先ほど事務局からも説明がありましたとおり教育振興基本計画については上位計画に県の基本構想がございます。当然そことの整合性を意識して作らなければここだけ勝手に作ればいいというものではありません。私がたまたま両方に関わっておりますので、今、基本構想で出てきている基本理念というのがまさに「人生１００年時代」滋賀で幸せに生きるというもので、サブテーマがつくる、そだてる、わかちあう、そういった形で出てきております。それに基づいていま様々な議論をしているところです。そこの下にこの教育振興基本計画が位置付けられると考えるのであれば、サブテーマでは人生１００年を見据えた教育というものをしっかり示すということが今回の基本計画の重要なミッションではないかと思います。ただ、小野田委員もおっしゃったようにこのサブテーマは表によく出てくるものなので、読みにくい、見づらい、わかりにくいというのは一番困ると思います。ぱっと見てわかるできるだけわかりやすい文言にするということが非常に重要だということで、１期が自ら高める、２期が共に育つということがキーワードになっているので、次の計画では。我々の提案として１００年を共に生きることを前提として生きていかないと１００年は豊かにならないという事を踏まえ、「人生１００年を見

据えた滋賀の教育」というイメージで考え話をさせていただきました。以上でございます。

会長　　ありがとうございます。では、次のグループの内容をお願いします。

委員　　我々のところは３人で話をしました。人生１００年という言葉はいろんなところで出てくることなので、それよりも今の世の中で何が一番大切なのかというと一人ひとりの力を付けることが一方で大事であるとともに、相手がいるということをしっかり認識しながら学んでいく、そして繋がっていくことが大事であると感じました。特に「思いやり」という言葉や「心」というものが教育や社会の中から抜けてしまうと、バラバラになってしまいます。家庭、家族があってもそれぞれがバラバラになっているという姿も散見される中で、その人と人との繋がりを大切にしていき、思いやりのある社会を創るという中での教育の位置づけということをサブテーマの中に位置付けたいという話がありました。基本目標については、このままでよいのではないかという話でした。以上でございます。

委員　　基本目標やサブテーマはこれでいいという前提の下、サブテーマに「人生１００年」ということが入ったのが今回の大きな特徴だろうということから話が膨らんでいきました。どういうことかと言いますと、第１期、第２期は自分を高める、共に育つというように「繋げる」「広げる」というイメージがありました。そこにこの「人生１００年」という時間軸が加わったことが新しいイメージではないかと思うのですが、このイメージを具体化していく時にそれぞれの段階での学びがバラバラであっては意味がありません。学びが積みあがっていくようなイメージで基本計画が示せるといいと思います。また、目標達成に向けた柱立てについても話をしたのですが、第２期の柱を参考にして申し上げますと、柱３の部分に厚みがでてくるのかなと思います。これは、家庭との連携を強化することが必要ではないかという考えです。「人生 100 年」というと、どうしても高齢化の意識があり、いままで学んできた人がさらに学び続けるというイメージはありますが、もっと就学前のことに注目をする、親として学ぶ等そういうところにも注目をしていく必要があると思います。そういったことから、資料４の文言から申し上げますと、「教育、労働、余暇のステージに分けず、複線型ライフプランに」変えていくことが必要であるということや、「親を学ぶ、親を伝えるプログラム」というキーワード、「子どものときに読書の楽しみを覚えると生涯に影響」するというキーワード、このあたりに注目していく必要があるのではないかというふうに話

が進んでいきました。そして、このように大人の学びが充実してくれば、子どもの学びも充実してくるだろう、あるいは子どもに対する教育力が増してくるだろうという意見でまとまりました。

会長　　基本目標の柱３について、親が学ぶという視点を加えるという点で大変貴重な御意見をいただきありがとうございます。それでは最後のグループ、お願いします。

委員　　５人で話をさせていただきました。いま３グループのみなさまがおっしゃったどういう方向性でというところまで話が及びませんでした。言葉としまして、基本目標の「たくましい」ということをどう考えるかという事が議論の中心になりました。不易という考えの中で、この基本目標が作られているというところで、確かに生き抜く、一人で生きていくという意味でのたくましいという言葉はキーワードになるであろうと思います。そういったことを分かったうえで、寄り添うということでもいいのではないかという意見がありました。力強さだけではなく、「優しさ」のイメージといいますか、そういったものも捨てきれないのではないかというところで正直いろんな意見が出まして、こういうところにまとめていこうという事までにはならなかったのですが、そのようなことが基本目標の中では話に出てまいりました。サブテーマの中では、人生１００年ということについて議論がありました。男性の健康寿命について滋賀県がトップになったことも受けてという事かと思いますが、単なる平均寿命の話でただ生きているということだけではなく、健康寿命と言う意味で人生の残りの部分はどうなのかということを考え充実した人生を送るということが大切なのではないかという話がありました。その中で、第２期のキーワードである「共に育つ」ということも大切ではないかという意見がありました。具体的にここをどうしていくかというところまで議論が進みませんでして、そういう段階でのいろんな話が出たところでございます。

会長　　ありがとうございます。優しさということが必要ではないかということと、それから人生１００年を見据えて、充実した１００年を考える必要があるとのことでした。ありがとうございます。そういったことを踏まえ、全体に関して御意見があればお願いします。

委員　　これからのキーワードはやはり「共に生きる」だと思います。人との共生もありますし、滋賀県でいえば琵琶湖との共生もあります。これが前回ＳＤ

Ｇｓの話もさせていただきましたが、今のお話も聞きながら共に生きるということがキーワードだと感じたところでございます。人生１００年を見据えて生きていくためには、一人では生きられません。やはりそのような共生社会でなければ生き抜けないので、共生していく人材を育成していくのが教育だという思いを持ちました。共に育つもいいのですが、やはり第３期ですから、人生１００年を見据えて「共に生きる」ということがいいのではないかという意見です。なぜ、生きるのかということで目標がなければ私たちは１００年を生きることはできません。何のためにと言いますと、私は滋賀で生まれ滋賀で育ちということですので、滋賀の環境であったり暮らしであったり伝統であったり生活や人、これを持続し守り、受け継いでいくためという部分が前面に出てきてもいいのかなという思いがございまして意見をさせていただきました。

会長　　ありがとうございます。各グループともに「共に育つ」「共に生きる」という要素をいれていくべきではないかという御意見がありましたが、その形でいかがでしょうか。

委員　　私も、基本目標やサブテーマというのはいろんな方の目につくものであり、それをもってイメージされ、いろいろな受け止め方をされると思います。どんな言葉をテーマに入れたらいいのかについては、非常に重要な仕事をさせていただいていると感じております。これからの人生を「共に生きていく」ということは大切な観点だと思われます。そう考えますと、御提案では「夢と生きる力」という言葉がほしいと思います。滋賀県の基本構想を見ましても、夢と希望を持つことが表現されています。夢や希望や志といったものは、子どもたちも社会も持ちにくくなっているからこそテーマに挙げていきたいという想いをしています。どんな言葉を選んでいくのかというところは重要です。また、この「共に生きる」という言葉は大事にしていきたいと考えます。

委員　　私も「共に生きる」という言葉の表現については賛成いたします。他でも出ていた、相手がいて繋がりや思いやりが大事だということからすると、「共に生きる」という言葉の中に含まれていると思います。この資料３の諮問の背景という所に引っかかってしまっているのかなと感じます。知事の思いだということで御説明がありましたが、それぞれの１番、２番、３番とあるものを見させていただくと、それぞれの個性が大事だということや自らの時間で考えるということで個人の部分が主力だという形になっているのではない

かと思います。知事はそういう思いなのかもしれませんが、私たちからするとその部分ももちろん大事だけれど、これからの滋賀の教育を考えていく時には、長丁場を生きていくわけですから、その中でみんなと一緒に力を合わせて何かを作るという力をどうつけていくのかという、そういう部分が必要であるということをこの会議として打ち出すということは大事な部分であろうかと思います。知事の思いのみでサブテーマができているように見えましたので、私として意見をさせていただきました。

委員　　先生がおっしゃることはまさにその通りだと思います。知事がどうだということは一旦置いといて、やはり比叡山高校さんで言いますと個人の修業があって共生というものがあるのではないかと個人的には思っています。ですので、基本目標としては、やり遂げる力や個性というのは強いかもしれませんが、あながち間違いではないと思います。サブテーマの中では、先ほどから御議論がありますように、共生、支え合う、寄り添うというのが形としては有りなのかなと思いました。

委員　　私も共に生きるということに関しては賛成なのですけれども、人生１００年を見据えたという「見据えた」という言葉が少し引っかかってまして、いろんな人がいて子どもさんもいろんな人生があって、人生１００年を言いたいのはわかっているのですが、みんなが健康に１００年生きられるかというとそうではないので、この「見据えた」という部分を「人生１００年時代」と変えていただいてはどうでしょうか。「見据えた」という言葉が強いのではないかと感じましたので。

委員　　今の御意見をお聞きして、逆の意見を述べるのですが、「人生１００年時代を共に生きる」としますと非常に客観的になるだろうと思います。「人生１００年を見据えた」とすることで、その人個人が先を見通してとか計画的にといった主体的な選択や判断が入ることになると思います。「見据えた」という言葉は強いかもしれませんが、プラスの強さと捉えることはできないかなと思っています。

委員　　基本目標は、みんなが共感できるものであって、サブテーマは、みんながどういうことかと考えられるものであるべきだと思います。先ほどから出ている「共に生きる」ということが私はよいかと思いますし、生きる力というのは一人の生きる力にどうも集中してしまう気がしまして、生かされているという、いろんな人と、あるいは食のことにしてもそうですが、いろんな事

があって生かさせてもらって明日があるので、そういうことを含めると誰が見てもそう感じられる言葉を選んでいくべきであると思います。

委員　　一人ひとりのことに加えて、みんなのことが大事だということで今の文章の中で見るならば、生きる力というと個人のものではないですけれど、生きる繋がりみたいないろんなところに書かれていますけど多様性の中で違いを認めていくということや誰一人取り残さない、見捨てることはないということからすると、何か社会というものを感じ取れるような言葉を入れれるといいのですが、それですと強いので「つながり」という言葉が一つ考えられるかなと思います。

会長　　ここまでの議論の中で基本目標に関しましては、優しさと言う要素も必要だということでそれは非常に重要なことだと思います。例えばこの要素を次に柱立ての中に強調して組み入れることとしまして、基本目標に関しては皆さんの強い反対がなければ「未来を拓く心豊かでたくましい人づくり」ということでいかがでしょうか。

（委員異議なし）

会長　　ありがとうございます。では、「未来を拓く心豊かでたくましい人づくり」はこのままでいくということにさせていただきます。そしてサブテーマに関しては、貴重な御意見をたくさんいただきましてありがとうございます。「共に生きる」という言葉を入れるということに関してはほぼ同じ御意見があったのかなと思います。これを共に生きる力とするのか、あるいは共に生きる教育とするのか、また共に育つ滋賀の教育とするのかここはまた御意見を伺いたいと思います。

委員　　「共に生きる」という言葉のなかに一人ひとりのつながりや共に社会を創っていくということが含まれているので、「共に生きる滋賀の教育」でいいのかなと思います。

会長　　いまの意見を踏まえますと、「人生１００年を見据えた共に生きる滋賀の教育」というのが思い浮かぶものでございますがいかがでしょうか。

委員　　第２期の時は「共に育つ」が括弧つきとなっているのですが、ここは皆さんどのようにお考えでしょうか。

会長　　第２期のときの括弧は強調の意味があったのでしょうか。

教育総務課長　強調の意味で括弧がついております。

委員　　つけた方がいいと思います。

委員　　私も教育に係る言葉がきて、高めるとか育むという言葉がつくとすっと教育にいくと思うんですが、共に生きる教育となるとどういう教育なのかとなりますし、共に生きる環境を作るのかということがあるので、括弧をつけて強調するのかもう少し言葉を変えるのかわかりませんが何かを加えるべきかとは思います。

委員　　教育は育むということを前提に成り立っているということもありますが、共に生きるための環境をつくることは個人個人が考えていかなくてはいけない時代なんだということでいうと、括弧付けで「共に生きる」滋賀の教育ということで多義性を含んでおくことも一つなのかなと思いました。

委員　　いまの教育においては、持続可能な地域づくり、まちづくりというところに重きがおかれてきています。まさに共に生きるための教育ということが今求められていて、個人の欲求を満たすだけではなくて、我々一人ひとりが豊かに生きるためのまちづくり、地域づくりをしていくため、我々一人ひとりが何を学び、それをどう行動に移していくのか、そのための教育をこの滋賀で作っていくという意味で「共に生きる」という言葉を使いたいなと考えています。共に生きるということをより意識した環境作り、機会づくり、そういったことをここでしっかり道筋を作って示していくべきかなという思いがあります。

会長　　ありがとうございます。それでは、基本目標とサブテーマがほぼ固まりました。

【目標に向けた柱について】

会長　　それでは目標に向けた柱についてご協議いただきたいと思います。まったくゼロからの議論というのは難しいと思いますので、第２次のものが整理されています。このあたりを参考にしていただきたい。それから諮問にあたっ

ての知事の思い、「滋賀ならではの学び」「近江の心」をどう生かすか。これを生かす時の考え方としては、たくさんあるかと思いますけれども、柱の１つにするというのが１つ。もう１つは３つの柱の中にどこか入れ込むということが考えられます。第２期の計画の３本の柱を見ていきますと、柱の２が教育の目標とかねらいとかを提示していて、それをどのようにやって育てていくか、という環境づくりが書いてあって、最後にそれを時間軸の中で、生涯にわたってどうやっていくか、そういう観点でまとめていただいています。こういったことも非常にわかりやすいのではないかと思います。それではまた 10 分か 15 分くらいになるかと思いますが、ご自由にご発言していただいて、グループをつくりまして、協議願いたいと思います。

（委員が４グループに分かれてグループ討議）

会長　　ご協議ありがとうございました。それぞれ議論も深まったことと思います。ちょっといろいろなところで議論に出ていました、今日配布いたしました目標達成に向けた柱の順番についての指摘がありましたけども、もともとは子どものたくましい生きる力が最初に来ております。今日は真ん中に、中心に来ているということで理解いただければと思います。それでは今ご議論いただきました内容についてまたお話しいただければと思います。

委員　　失礼いたします。これからの柱ということで４人で話をしたんですが、まず、少し大胆なんですけども、今回のテーマですと、人生 100 年を見通した教育のあり方ということであれば、柱１、柱２、柱３の順番を今回は変えるべきではないか。柱１、柱２っていくと、結局子どもの教育というところに終始してしまって、そこが人生 100 年を見通したっていうところとどうつながるのか、そこが非常に見えづらい。むしろ今回は人生 100 年の中で学校教育がどうあるべきか、社会に出た後でどういう学びが必要なのか、定年退職した後、高齢期の生きがい、高齢期の生活、30 年、40 年を充実させるために必要な学びっていうのは何なのか。そういったものを示しながら、それをつなげていくことで、人生 100 年を見通す、そういう視点がとても大切だと思うんですよね。そういう意味では、あえて今回の場合は柱の３、いつも生涯学習、社会教育っていうのは最後にくっついている。むしろ、ここをもっと今回は厚みを持たさないとまったくサブテーマと合わなくなってしまう。１つの提案ですけれども、柱の１に３の内容を持ってきて、ただ、この内容だと固いので、我々の中ででた話でいえば、生きがい、くらしがい、働きがい、の学びをまさに生涯にわたって支援していくということで、まず「生きがい、

働きがい、暮らしがいをつくる生涯学習の振興」という柱を据えて、その次に、そうした学びの中で子どもたちが学校教育の中で何を学び、社会に出てからも学びを続けていくために学校教育というのはいま何をすべきなのか、ということ柱を置くべきではないでしょうか。今、学校教育では、生きる力を育むだとか、あるいはアクティブラーニングだとかの必要性が強調されてきているわけですね。それは、承りの学習でなくて主体的に学習にかかわることで理解を深めるということもあるけれども、同時に教育というのは与えるもの、与えられるものではなく、自ら求めていくものだという姿勢を身に付け、社会人の基礎力を獲得するために必要なのではないでしょうか。だから、人生 100 年を見通した学校教育という視点からいえば、子どもたちの主体的に学ぶ力を身に付けさせる必要があるという、これからの学校教育の役割というのが明確に見えてくるのではなでしょうか。そういうことで、例えば１番を、「生きがい、くらしがい、働きがいをつくる生涯学習の振興」とすれば、柱の２で、僕らの中では、「子どものたくましく生きる力」を、たくましくというよりも、今回のサブテーマでいえば、「共に生きる力を育む」という言葉のほうがいいんじゃないかと。柱の３は、このままで子どもの育ちを支える環境をつくると、そういう順番でイメージしていったほうが今回に関してはいいんではないかと、こういう結論に達しました。

会長　　滋賀ならではの部分はどうですか。

委員　　それは柱というよりは、どこかの中の重点項目として入れたらいいんじゃないかという感じです。

会長　　各グループお話しいただいた後に議論したいと思いますので、次どうぞ。

委員　　私たちのところは３人で話をしましたが、特に柱の３と諮問にあたっての知事の思いのところで話をしておりました。柱の３のところでは、地域の中で学びをしていくというイメージと、それからだんだん地域というものがいままでとはだいぶイメージが変わってきていて希薄化していくところがあるので、その地域そのものを創っていくというイメージがもう少しなにか必要ではないかなという話をしておりました。言葉の中で「社会をつくる」という中にそれは含まれているといえば含まれているんですけども、もう少しイメージできるものにしたほうがいいなというような話です。言葉をこのようにしようという提案は特にないですけれども。もう１つの知事の思いというところですけども、知事の思いではあるんですけども、これは大切なことだ

なということがありました。やはりせっかくいまＩＣＴなりＩｏＴなりが使えるようになると、横のつながりがもう少しできるようになる。特に文化的なものの、文化財も、各市町がもっている文化財がもう少し価値を高めるためにはつながりの中でのストーリー性みたいなものを構築していくことが大事であるし、また、学校教育の分野においてもいろんな教材であったり、いろんな働き方改革に必要な情報なりツールは、もっと横で共有できるものは共有していってですね、働き方がもう少しうまく連携できるようになると、例えばクラウドを使うとかいろんな方法があると思うんですけども、そういう意味では滋賀ならではの学びの中で滋賀の著名な方々からの学びももちろん大事ですし、近江商人とかいろんなそういう文化的な受け継ぐべきものを大事にすることもそうですけども、いまの現代での滋賀とのつながり、地形的にも１つのまとまりがある。地形を持っている滋賀というものの学びの連携なんかも１つの柱にしうるものではないかという話がありましたので、これはできたらしたほうが、１つ柱を立てたほうがいいのではないかという意見です。

会長　　ありがとうございます。

委員　　失礼します。このグループは先ほど目標達成に向けた柱立てについて報告をさせていただきましたので、それを踏まえた論議からスタートしました。「人生 100 年」をどの時点でどのように見据えるのか、それによって、とらえ方がかなり変わってきます。「人生 100 年」をこういうふうにとらえるんだということを定義するとか、あるいは、小学生の夢、壮年、働き世代の夢、御高齢の方々の夢をそれぞれに示し、それらが、世代をこえてつながっている、そういうことを模式図にしてイメージを膨らませてもらえるようにしてはどうだろうというアイデアが出ておりました。また、「人生 100 年を生きる」というときに経験知を増やすことが大事ではないかという意見がありました。今の時代、学校教育だけがすべてではなく、また、希望の会社に入るということがゴールでもありません。学歴社会というよりも本当に生きる力を必要とする生涯学習の時代になってきていると思いますので、そういう意味からも経験知をどのように増やしていけばよいかを示唆する計画、それを行政としてサポートしていく計画が示せればいいと思います。ただ、学校教育がすべてでないといいながら、好きなことだけ追求すればいいというものでもないので、「共に生きる」というキーワードに「人の役に立つ」とか「人とともになにかを成し遂げる」とかいうことの大切さを加えていくべきではないかという話にもなりました。求められていた柱立てということと少し方向が

違ったかもわかりませんけれども、御容赦ください。

委員　　私たちのグループは４人で話合いをさせていただきました。最初にいただきました資料１の柱１、２、３と資料６を中心に話し合い、資料６の柱１、２，３の順番が違う、ということから柱１、２、３にはどのようなことが書き込まれているんだろうと、内容を注目することからスタートしました。柱１のところでは、主に、「確かな学力」、「豊かな心」、「たくましい体」という項目が挙げられており、目の前の子どもたちに直接かかわっていただく学校教育の取組がしっかり書き込まれていると思いましたし、そしてまた柱２では、学校を中心としながら家庭や地域にも働き掛け子どもの育ちを支える環境を作っていくということ、そして柱３のところが、今回、大事にしようというところであり、人生１００年時代を見据えて、地域づくりを含め、地域のあらゆる機関ともつながりながら、生涯学習、社会教育を充実させるという内容であり、この順番がいいのだろうなと話をしていました。また、知事の思いの中での、「滋賀ならではの学び」、「近江の心」は大切にしたいと思います。確かに、ほんとうに滋賀県というのは特色がございます。地域の教材もたくさんございますし、豊かな歴史、人物、出来事なお、多くのものが教材になるということと、それから、美しい自然、環境に恵まれているということです。美しい琵琶湖、山、里山、そして里というようにこれも滋賀県の特色であり、独特の環境を形成していると思います。それから滋賀県の企業とかですね、そうした現代の特色というものもありますので、それらをしっかりと柱１、柱２、柱３のそれぞれに埋め込むというか、ブリッジのように渡すというか、それぞれのところに滋賀の教育の特色を入れ込むというような形になったらどうかなと思います。これからの社会を見据えた教育の中で、プログラミング学習とか、国際バカロレアの観点とか、そういったことも落とさずに各項目の中に盛り込んでいかなければならないではないかということを話題にしておりました。以上でございます。

会長　　ありがとうございます。基本的には、順番はどうであれ、この３つの要素については、共通した認識だと思います。これはほぼこのまま、中身はもう少し、枠としてはこういったものを協議していきたい。問題は、滋賀県固有の文化遺産と言いますか、教育資産というものをどうやってやっていくかということですけども、２つ意見がございまして、１つは柱の１つにしたらいいというものがありました。もう１つは、最後のグループからありました、それぞれの柱にできる限り入れ込んでいくという考え方がございます。この

あたりのご意見をお伺いしたいと思います。

委員　　たぶんこの柱というのはいままでの流れとは全然違う。柱を立てるとなるとですね、新しい視野になると思うんですけども、たぶんいろんな人たちの中で自ら滋賀であるというアイデンティティみたいなものをどれだけみんな持っているのかなというとこらへんのなかでですね、やっぱり関東に行っても私は滋賀です、で、滋賀はこんなところですと言えたらいい。単にそういうことだけじゃなくて、この滋賀というものをもっと意識することによって、いろんな、自然はこうである、学びはこうであるということ、伝統はこうであるということがいろんな分野でそれぞれ大事にはされてきたんだけど、１つその滋賀というくくりでちゃんとみんな学びをつくっていこうと意識をすることで、たぶんいままではそれぞれがあったものが、１つに集約され、また別の視野でとらえなおす１つのきっかけづくりになるような、刺激を与えるような、これはなんとなくチャンスになりうる柱になるのかなと、私は少し思いました。たとえば地域の中でいろんな伝統であったり、文化であったり、祭りというものが大切にされているんですけど、みんな滋賀でありながら隣の町のことは知らないんですよね。でもそういうものを１つのストーリーに作っていくという作業はあんまりいままで僕の記憶の中ではそんなになかった。でも今年、文化遺産の中に湖の近くの文化圏の中で、たとえば、サンヤレ踊りとかいろんなそういう祭りが、このへんとこのへんとこのへん、市とか町の境を越えて認定されるようなことがあったりということで、隣にもこんなのがあったんやということを改めて知る機会ができたんです。そういうことってこれからの、例えば単に観光や産業につなげるだけでなくって、滋賀そのものがもう少し意味合いをちゃんと学んでいき、価値を高めるものとして、大事な視点として確かにこれはあるなと、私はそう思うんです。ですから、ほかの３つの柱ほど大きな柱にはならないかもしれんけど、細い柱でも、ちょっと添えておくと、床柱みたいなものになるかもしれませんけど、ありうるのではないかなという風には私はちょっと考えます。

委員　　いまいろいろとご意見を聞かせていただきまして、ちょっと柱を構造的にイメージしますんですけども、柱でないとダメなんですかね。３本の柱でなくて、私は横やと思うんですね。真ん中に子どもの学力、ここでいう柱の２が横にあって、そしてそれを支える、ここでいう柱１の子どもの育ちを支えるを環境という地域も含めまして、それがこの土台にあり、そしてその子どもたちというか、その力が今言われました生涯教育、１００年生き抜く生涯学習につながっていくので、この方向だと私はなんかイメージしまして、柱

にするとどうなのかなと、難しいところが私はありまして、イメージ的に。

会長　　先生がおっしゃっておられる考え方になっていると思います。表現の違いかと思います。

委員　　なるほど。だからこの順番になっているのかな、どうかな。例えば、三角形とか、いまちょっと意見が出ていたんですけども、子どもの教育、それからそれを支える環境ですね、その三角形の頂点に生涯学習があって、滋賀ならではの学びというのはやはりこの部分だと思うんです、私は。それこそそこに滋賀ならではの教育が入ってこなければならないと思うので、何かその、構造と言いますかね、構成と言いますか、そんなことをイメージしまして、滋賀ならではの学びを別柱にたてるというよりは、私はこのここで言いますと、柱３に含まれてもいいのかなと思いますが、そんなことを漠然といま思いました。

会長　　もし入れるとすれば、先生がおっしゃられるとおり柱３がいいのかな。そのやり方でいけばですよ。それかもう１つ立てるか。

委員　　失礼します。「近江の心」について申し上げますと、今の３名の委員さんと同じで、柱３のところで示すのがいいなと思っています。といいますのは、第２期の計画でも「近江の心」が示されていましたけれども、学校教育の中でそれをどれだけ意識して、学校現場が取り組んできたかというと、うーんとちょっと考え込まざるを得ない。目の前のことに追われてしまって、そこまでたどり着けないという状況があったのではないかと思うからです。ですから、学校教育の中だけで意識するのではなく、滋賀に住む人は全員が「近江の心」を意識して生活したり学んだりするように位置づけるべきではないかと思います。また、構造的というご意見が先ほど出ておりましたけれども、生涯学習が先に示されていると、例えば生涯学習に役立つ「読み解く力」とはどういうものだろう、その時、学校教育はどんな役割を果たせばいいのかと考えるようになり、学校で主体的に学ぶ必然性が見えてくると思います。学校教育ではこれが大事ですよ、読み解く力を身につけましょうねと、いろんなことが書いてあっても、それが生涯にわたってどのように活きてくるかがわからない。それこそばらばらになってしまう。例えば、中学校の進路指導でも、高校に入ることがゴールではなく、もっと先を見据えて、例えばこういう職業に就きたい、そのためにはこういう進路をとるべきだ。その進路をとるには、自分は中３の３月にどういう選択をするのかということを考

えさせていきます。それと同じように、生涯学習の、自分が目指す「人生１００年」があって、そこに近づくために、あるいはそこで力を発揮できるように、どういう時期にどんな力をつけていくべきかを示していくといいのではないかと思いました。

委員　　グループのほうであまり滋賀ならではの話が十分にできてなかったので、個人的な考え方ですけど。滋賀は非常に教育の部分で強みのあるところがたくさんあります。歴史も豊かである。それから自然も豊かである。その辺は子どもの体験活動であったり、あるいは生涯学習としてのいろんな教育資源としても非常に有効であり、それから産業面においても、中学生が全員チャレンジウィークの体験をしているということで、産業という面でも教育に貢献してもらえる土壌がある。さらに子どもたちが地域の行事等に参加する率が高いというような調査等もあり、コミュニティの教育力、先ほどの隣の町との横のつながりが不十分という話もあるかもしれませんけれども、地域の教育力というのも期待できるなという部分があると思います。それと大学もけっこう多いほうであるということからすると、高等教育機関までの教育機関の連携もあるし、社会に出てからの学びの場もあるだろうと。そういうようなことで滋賀県は強みのある教育環境がたくさんあります。そういうものを先に柱を立てて、そういう要素をそれぞれの柱の下に据えていくのがいいのか、それをいま全部滋賀の強みとして生かしていこうということで１本の柱に据えるのか、それがどちらがいいのかというのは、柱の据えられようによって考え方が変わってくるので、私はいまどちらがいいのか、はっきり決めかねるんですけれども、そういう意味で滋賀ならではというのはたくさんあるんじゃないかなと思っているところです。

会長　　今整理していただいたとおりの問題なんです。

委員　　皆さん方のご意見を聞いて本当にそうだなと思いつつ、柱という表現ですると、これはもう柱というほどの力を受け止めるものではないかなと思うんですけども、筋交いのような、横ぐしのようなという意味で、ちょっと意識すべき点である。どっか中に入れてしまうだけでなくて、意識すべき点であるなということは共有できているのかなと思いました。表現のあたりはまたどうするのかというのはあります。

委員　　イメージだけ言うと、「滋賀ならでは」、「近江の心」というのは全部に入ってくるんですよね。生涯学習も、地域学や地域の学びを通して、地域の方々

も学ばないといけないし、ふるさと意識というのはやっぱり子どもの時代から体験を通して身に付けていくもので、もっと学校教育の中で郷土教育というものをもっとやっていかないといけないとなると、柱１にも２にも３にも全部それが共通に入っていかなければならない項目です。あとは表し方で、１つ１つに入れてしまうと重要性というのが１つ１つがばらけて薄まって見えづらくなるというデメリットはあります。みなさんの意見に共通にあるのはすべての柱に共通にこうした考え方というのは入れ込んでいかないといけない、そういう考え方は共通しているみたいですね。ならば、柱の書き方を柱１、２、３と並列に書くんじゃなくて、柱１、２、３の下に長方形の四角を作って、そこを柱４として書いてもらうんであれば、たぶんイメージとして、柱４だけはすべての柱と密接にかかわる大切な柱ですよという見え方ができるんじゃないかなと。ちょっと見せ方の問題ですが、そういうことであれば、柱としてあっても、逆に言えば、すごくわかりやすい、見えやすいものになるんじゃないかと思ったので発言させてもらいました。

委員　　私たちのグループも同じ考えで、橋のような形で横に入れるという意味で「柱１、柱２、柱３のそれぞれに入れ込む」という表現を使わせていただきました。

委員　　資料６の下のところの柱１～３の上に参考とありますが、そこに、もちろん下支えという表現もありますし、上からつないで降り注ぐという表現もありますので、滋賀の、近江の心を位置付けるとより意識できるのかなと思います。

会長　　柱ではなくて、それぞれの中に入っているということをうまく表現できるような方法を考えるという風な理解でよかったでしょうか。

委員　　視覚的にわかるのであれば柱４でも。

会長　　ではそういう方向で考えていかがでしょうか。

（異論なし）

会長　　ではそういう方向で考えさせていただきます。時間が来ましたので、作る際にはいろいろ先生方の御意見を反映していきたいと思っております。各世代の夢とか課題を入れ込むとか、それから新しい世代に向けたプログラミン

グ学習、それから超スマート社会が叫ばれていますし、これに応える力というのは絶対必要になってくる。この辺はどっかに入れたいと。それでは今日の議論を生かしてですね、どのような形で書くかはこちらにお任せいただいて、文言はこちらで書かせていただきまして、こういったものを整理しまして、具体的な課題の、この下に入ってくるものを次回のこの会議でご提案させていただきます。たたき台みたいなものですが、それを提案させていただきますので、またたくさんの御意見を頂戴できればと思います。